

Top

トップと語る

78

interview

STATION Ai株式会社



STATION Ai株式会社 代表取締役社長 兼 CEO

佐橋 宏隆氏

◎聞き手

十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔

SAHASHI Hirofumi

STATION Ai Corp.

「起業」はもはやリスクではありません。この地域のカルチャーを変革し、学生にとって起業することやスタートアップで働くことが当たり前の選択肢になる文化を創りたいと考えています。

STATION Ai株式会社は2024年10月に愛知県名古屋市に開業した日本最大規模のオープンイノベーション拠点です。愛知県の「Aichi-Startup 戦略」の中核を担い、国内外のスタートアップ、事業会社、大学、自治体などが集結するスタートアップ・エコシステムの形成を推進しています。オフィス・スペースやイベントスペースに加え、テックラボ、宿泊施設、託児施設等も備え、革新的なアイデアの実現を多方面からサポートしています。

STATION Ai株式会社 代表取締役社長 兼 CEO

佐橋 宏隆 氏

◎聞き手

十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔

今回は、STATION Ai株式会社をお訪ねし、代表取締役社長 兼 CEOである佐橋 宏隆(さはし ひろたか)氏からお話を伺いました。

日本最大規模の オープンイノベーション拠点、 STATION Aiの挑戦

—— はじめに、STATION Aiがどのような施設なのか、概要をお聞かせください。

●佐橋社長(以下、敬称略)：STATION Aiは日本最大規模のオープンイノベーションの拠点として、スタートアップをはじめ、彼らとの協業を望む事業会社、大学、自治体などが集う施設です。スタートアップの成長支援はもちろんですが、最大のテーマであるオープンイノベーションの推進に力を入れています。例えば、事業会社とスタートアップとの協業を促進するために、お互いの

ニーズをマッチングさせる契機となるイベントから、各種戦略の立案、従業員の採用、人材のスキルアップ等に係る具体的な支援まで実施しています。



十六総合研究所
代表取締役社長 澤田 大輔

—— 開業時はスタートアップ500社、パートナー企業200社が集まったとのことでしたが、現在はいかがでしょうか。

●佐橋：現在ではスタートアップが約600社、パートナー企業が約400社になりました。最近は自治体の入居も増えてきており、愛知県内の自治体はもとより、岐阜市や私の地元である桑名市など、愛知県外の自治体も増えています。従来の取組みでは解消できなかった地域課題に対するソリューションを有するスタートアップとの出会いなど、地元にはない新しい事業者との出会いを求めていると思いますね。

STATION Aiのビジョン

—— 「オープンイノベーション」を戦略の軸に据えられた経緯や思いについてお聞かせください。

●佐橋：この事業は愛知県の「Aichi-Startup戦略」構想にソフトバンクが手を挙げたことから始まりましたが、当初からオープンイノベーションを中心に据えていたわけではありません。当時、



オープニングセレモニー



名古屋 鶴舞にある国内最大級のオープンイノベーション拠点

特に製造業のDXが進んでいないとの地域課題がありました。その背景には、愛知県を中心とするこの地域は工学系に強い大学が多い一方で、ソフトウェア人材の地域外流出が多いことなど、DX化が進まない本質的な課題があると認識していました。世界のスタートアップの7割はソフトウェア産業です。こうした状況を踏まえ、製造業とスタートアップを掛け合わせることで製造業のDX化を実現したいという強い思いから、オープンイノベーションを軸に据えました。

アカデミアとの連携と起業文化の醸成

—— 学生の起業を促すなど、地域のカルチャー変革にも力を入れていらっしゃいますね。

●佐橋：この地域には、以前から「良い大学を出て、大手の製造業に入るのが良い」というカルチャーが根強くあり、この点は私もよく理解できますが、そのカルチャーから変えていきたいと思っています。今の時代は、大企業こそ起業家精神を持つ人材を求めています。「起業」はもはやリスクではありません。この地域のカルチャーを変革し、学生にとって起業することやスタートアップで働くことが当たり前の選択肢になる文化を創りたいと考えています。

—— 高校生や大学生といった学生向けのプログラムの手応えはどうか。



STATION Ai株式会社
代表取締役社長 兼 CEO 佐橋 宏隆氏

●佐橋：愛知県が主催となり、STATION Aiが運営する「起業家育成プログラム」では、社会人向けと学生向けがあります。社会人は、今いる会社をすぐに退職して起業することが難しいため、学生の方が早く結果に繋がりがやすい傾向にあります。実際に、STATION Aiを含めたこの地域のスタートアップ・エコシステムに関わる皆さまの取組みが実を結び、大学で起業部が増えたり、アントレプレナーシップ教育を導入する大学が増えたりと、大きな手応えを感じています。この勢いには、今、国全体でスタートアップが盛り上がっていることも大きく影響していますね。

事業会社とスタートアップの連携を促す仕掛け

—— 入居されている事業会社は、STATION Aiをどのように活用すれば効果を最大化できるでしょうか。

●佐橋：積極的にスタートアップとの接点を持つ



対談風景

STATION Ai株式会社
代表取締役社長 兼 CEO
佐橋 宏隆氏 (右)、
十六総合研究所 代表取締役社長
澤田 大輔 (左)

ていただきたいです。なかにはスタートアップとの協業に関心はあるけれど、どう動いていいかわからない企業もいらっしゃいます。「STATION Aiに入って席を構えれば何かが起きるのではないか」という期待感を持って入居される企業もいらっしゃいますが、個室に入って日々の仕事をやっているだけでは変化は生まれません。事業会社の方々には、ただ席を構えるだけでなく、日々開催されているイベントに顔を出したり、コミュニティマネジャーを頼ったりするなど、STATION Aiが準備している仕掛けをうまく活用していただきたいです。また、STATION Aiに入る前からスタートアップとの協業を進めていた企業にとっては、これまで以上に優れたスタートアップと出会う確率が高まるという点が大きな魅力の一つです。

—— 一般的に起業したばかりのスタートアップは知名度も低く、事業会社の門戸を開けるのは容易ではありませんが、そうしたスタートアップにとって、STATION Aiに入居しているということにはどのようなメリットがあるのでしょうか。

●佐橋：最大のメリットは、潜在顧客と容易に繋がれることです。STATION Aiは、潜在顧客同

士が日本で最も効率的に繋がれる拠点ではないかと思っています。現在、オンライン会員を含めてSTATION Aiに入居しているスタートアップの4割強は東京の企業ですが、彼らはこの地域での協業先や顧客を求めています。また、創業期のスタートアップは事業運営に関する知見がまだ十分でないため、多角的なサポートを必要としています。STATION Aiには、そうした彼らに必要な支援機能が一通り揃っている点も大きな魅力です。

そして、徐々にですが、成功や失敗の経験を持つ先輩起業家から直接話が聞けたり、事業に必要なスキルを持つ人材が組織の垣根を越えて協力し合ったり、真の生態系(エコシステム)が形成されつつあり、効率的な事業成長の機会が増加しています。こうしたことをメリットとして実感していただけたと思います。

偶然の出会いを生む空間設計

—— STATION Aiでは、偶発的な出会いからイノベーションを生みだそうとしていますね。メンバー同士の自然な交流を促すための工夫についてお話しください。



偶発的な出会いが生まれる日本最大級の coworking スペース



【7F】ルーフトップバー



【2F】ヘラルボニー社のアート作品

●佐橋：快適さはもちろんですが、設計段階から「いかに自然な交流が生まれるか」を重視してきました。例えば、建物の中央にスロープを設けたり、オフィスフロアの壁を一切なくしたりすることで、誰がどこにいるかを発見しやすく、声をかけやすい造りを意識しました。また、コミュニティの“たまり場”がしやすい環境づくりも心がけています。7階に新設したバーカウンターもその一つで、お酒をコミュニケーションの有効なツールとして活用し、交流を促す仕掛けです。

—— 先日、増席のためのリフォームもされましたが、交流の機会はさらに増えているのでしょうか。

●佐橋：そうですね。増設した個室や固定席はすぐに完売し、常に満室の状態が続いています。それに伴い、3階の coworking スペースの利用者やイベントの数も増えていますので、施設全体で自然な交流は着実に増えてきていると感じますね。

創造性を刺激するアートの力

—— STATION Aiの館内にはアート作品が数多くありますが、芸術面・アートに対する思いをお聞かせください。

●佐橋：私自身、アートに詳しいわけではありませんが、芸術家が自らの生き様や物語を作品に込めるように、スタートアップもまた、原体験や社会課題への強い意識を原動力にゼロから事業を創造します。両者は表現方法が違うだけで、根底のストーリー性において通じるものがあると思います。

実際にこの施設でも、アートを導入する前は殺風景な空間でしたが、導入後は全く違う印象になりました。アートは、創造性を刺激するクリエイティブな環境づくりという意味でも非常に重要であると感じています。

世界を見据えたエコシステムの深化と 未来への戦略

—— 今年2月、スタートアップの国際的な祭典であるTech GALAが名古屋で開催され、最終日にはSTATION Aiも会場となりました。また、来年の1月27日～29日に開催されますが、どのように期待されていますか。

●佐橋：これまで日本では、世界的なスタートアップイベントが東京や福岡に集中しており、名古屋には地域のエコシステムをPRする大規模な機会がありませんでした。私たちの「この地域を世界と肩を並べるイノベーション都市にする」という目標を達成するには、全国、そして世界中からスタートアップ関係者が集まる場が不可欠です。世界的に日本の市場への注目度がまだ高くないなかでも、「今、愛知が頑張っている」ということを力強く示し、私たちSTATION Aiとしてもこの機会に確かな成果を出していきたいと考えています。



STATION Ai 内の十六FGブース



産業のルーツや起業家の業績を伝える「あいち創業館」

—— 愛知県の大村知事が「愛知県に世界レベルの施設ができた」と発言されましたが、今後、どのようにスタートアップのグローバル展開を支援していくとされていますか。

●佐橋：STATION Aiは、愛知県が世界中の機関と結ぶ協定を、実質的で成果のある協力関係へと発展させる役割を担っています。

海外展開には、日本で成功してから海外を目指すパターンと、創業初日(Day1)から世界市場を狙うパターンがあります。後者は、起業家自身が海外現地の課題を見つける必要があります、外部からの支援が難しいです。

私たちは今後、世界を目指す日本の起業家を増やしていきたいと考えています。そのために、海外スタートアップの入居数を増やしていきたい。そして、日本の起業家が「英語圏全体がビジネスの場である」という海外起業家の感覚を肌で感じられるようになる、そんな環境を創り出していけたらと考えています。

次なるフェーズに向けた展望と 譲れない信念

—— 1周年を迎え、手応えを感じている点、また、2年目以降のテーマや課題をお聞かせください。

●佐橋：私たちは、活動を約3年ごとのフェーズで区切って考えています。最初の3年は、開業前の準備期間を含め、この地域のカルチャーを変

えていくために、起業する人・スタートアップで働く人・スタートアップと協業する会社を増やすということに注力してきました。この点については、大いに手応えを感じています。

これからのフェーズでは、成功事例を増やして、エコシステムの形成を促進していくことが最も重要です。特に、製造業がスタートアップと協業する際の「型」を確立していきたいですね。開業から1年が経過するSTATION Aiですが、今後も基本的な活動は変わらず、より高度な活動に昇華していくことになるだろうと考えています。

—— 運営において譲れない一線はありますか。

●佐橋：譲れないのは、私たちが不動産事業者ではないということです。施設の収益性だけを追求するのではなく、入居する「スタートアップの質」にはこれからもこだわり続けたいです。入居企業が成長し、このSTATION Aiが手狭になった後も、その先のステージまで成長に寄り添い、可能な限りサポートを続けていきたいと考えています。

—— 今後の経営において実現したいことや、展望などをお聞かせください。

●佐橋：中小企業のなかには、世界に誇るべき技術を持ちながらも、新たな事業を開発する部署

を設置する余裕がなかったり、AI人材が社内になかったりして、事業変革に悩んでいる企業が数多く存在します。そうした企業は、スタートアップとの相性が非常に良いはずです。また、スタートアップとの協業だけではなく、時にはM&Aという形があっても面白いと思います。こうした企業同士の橋渡しを進めることこそが、STATION Aiが最終的に目指すべきものの1つではないかと考えています。

ただ、そうした企業に私たちが直接働きかけるのは非常に難しいです。岐阜の企業と関わる機会がこれまで少なかったなかで、十六フィナンシャルグループさんに繋がりを持つきっかけを作ってもらっています。今後も、企業との貴重な「橋渡し役」として、引き続き力を貸していただきたいですね。

—— 本日は貴重なお話をありがとうございました。



本社にて

(対談日：2025年9月1日)

会社概要

- 本 社／愛知県名古屋市中区鶴舞1丁目2番32号
- 設立／2021年9月1日
- 事業内容／スタートアップ支援・事業創出支援事業、施設整備・運営事業、ファンド運営事業